
スフィアの神

琶苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スフィアの神

【NZコード】

N4911M

【作者名】

芭苑

【あらすじ】

人間、妖精、魔族、獣人、ドワーフが生存する世界『スフィア』。

妖精族と魔族と獣人族の戦争に巻き込まれ、存在が激減した人間とドワーフは戦争を止めるため、世界の王である神を召喚した。神は一つだった大陸を4つに分けることで戦争をおさめた。

それから500年がたつた。

人間として生き残ったクロウは小さな村で隠れて暮らしていた。
その村の近くの森で光とともに現れた少女、シズクは突然クロウに
キスをし、契約をしてしまった。

そして、小さな村を妖精軍が襲ってきたのだった。

第1話・契約と別れ

人間、妖精、魔族、獣人、ドワーフが生存する世界『スフィア』。力を持つ妖精族、魔族、獣人族の仲は悪く、互いににらみあい、戦争していた。

妖精族は“秩序”のために…。

魔族は“支配”のために…。

獣人族は“自由”のために…。

それぞれの世界づくりのために、長年争いを続けていた。

戦争に巻き込まれた人間とドワーフは年々数が減つていった。

生き残った人間とドワーフは神を召喚した。

神は一つだつた大陸を4つに分散した。

1つは妖精族が統治する『フェリアス』。

1つは魔族が統治する『ティスウイル』。

1つは獣人族が統治する『グレイル』。

一つは神が統治し、中立の国『ソレイユ』。

神は大陸を分散することで、戦争を止めた。

神が大陸を分散してから、500年がたつた。

【妖精族の国『フェリアス』】

「クロウさん！
どこにいますか？」

少女がアセルア村の外のアセルアの森で人を捜していた。

名前で呼んでも返事はなかつた。

今度は先ほどよりも大きい声で呼んでみた。

「クロウさん！…！」

「そんなに叫ばなくとも聞こえている」

「え？どこですか？」

「…」

少女が声がした方を見るとそこは大樹の上だつた。
大樹の上から一人の青年が降りてきた。

「クロウさん、大樹にあがつて何をしてたんですか？」

「大樹の枝が傷んで折れそだつたから布で折れないようにしてき
ただけだ。」

それより、何の用だ?」

クロウに言わされて少女は本来の目的を想いだし、ハツとした。

「そうだったわ。

クロウさん、おじいちゃんが呼んでましたよ

「村長が……。また魔物退治か?」

「分からぬけど、多分そんなんじだと思います」

「分かった。面倒だが、世話になつてゐから逆ひりつ駄こもいかない
な。

それから、リリイ」

「はい」

「敬語はやめろ。『さん』もいらない。

俺たちは他人じゃないだろ」

「え……でも……」

「敬語を使わると俺としては窮屈だ」

「わかりまし、わかつたわ」

「あんまし村長を待たせるわけにもいかないし、村に戻るか

「やうだね。早く行きましょ、クロウさん……（じゃなくて）クロ

ウ

クロウとリリイは大樹を離れ、森の外へと向かい、村へと戻った。

【アセルア村】

「遅い！ もつと早くこんかい！…」

「年ぐつてるくせに、短気なじーさんだな」

「老人をもつと敬わんかい」

「そんなことより用件はなんだ？」

““そんなこと”ではなかろう。……まあ、いいわい。最近、夜になるとアセルアの森で変に光つておるのじゃ

「まさか、その光を調べろっていうのか？考えるだけで面倒だな」

「お主はもともとは傭兵じやうづ。少しは働くんかい！」

「クロウ、村人がその光を怖がってるの。私も手伝つから調べに行きましようよ」

「まあ、この村には世話をになつてるしな。俺が人間だつてことを隠してもらつてるし…。面倒だがやるよ」

それから夜になつてクロウとリリイはアセルアの森へと向かつた。
昼の森とは違ひ夜の森は静かだった。

「森に来たのはいいが、光がないと調べようがないな

「でも、そろそろ光が出るころだけど…。
あつー光ったわ」

森の奥の方で何かが光つた。

一人は光が見えるのと同時に光つた方へと走つて行つた。

光っていたのは大樹だった。

「大樹が光ってる…」

「なんか光のなかになんかあるな。ちょっととどけてくるからそこで待つてる」

「え？ 危ないわよ」

「とりあえず、光の原因を突き止めないといけないだろ。じゃねえとあのじーさんがつるさくてさらに面倒だ」

クロウはゆっくりと光の中に手を差し伸べた。
そして光の中のものをつかむと手を引いた。

「！！」

「女人?!」

クロウが大樹から光を取り出すと、光は少しずつ消えていき、光の中から少女が姿を見せた。

少女は目を覚まし、目の前にいたクロウを見た。

「あなたが……私の契約者……」

少女はやつづぶやくと有無を言わばず、クロウに口づけをした。

「なつ、何してんのよつーー！」

クロウが少女を引き離すより先に、リリイが少女とクロウを引き離した。

「あなた、いきなり出てきて何なの？」

しかも、（私が先にキスするはずだったのに）クロウにキスして！

！…！」

「キス？あれは契約の誓いよ

「契約？なんの契約だ？」

「次なる世界の王になるための、神の地位につくことができる契約

「神の地位？次の世界の王？

何を言つてゐのかわからぬーけど、とりあえず村に戻つてゆつくり説明してくれ。

この森は危険が少ないとはいへ、あんまり夜に長留するのはよくないからな

「からな」

「わかつたわ」

クロウとワリイは少女をつれて、村へと戻った。

二人は森から帰つたら、村長の家へとはいって行つた。

「おじいちゃん、今戻つたわ」

「無事じゃつたか。

ん？ そのお嬢さんはなんじや？」

「」いつが光の原因だ」

「はあ？ お前さん、ついにバカになつたのか？」

「そう思いたいなら思えばいいだる。
だが、この女が光の原因なのは事実だ」

村長はリリイを見た。

リリイは村長からの視線に気づくと、うなづいた。

「本当に、おじいちゃん。この娘こが光っていたの」

「どうあえず、リリイの部屋に行つていいか?」

「やうね。私の部屋に行きましょ」

クロウとリリイは少女をつれてリリイの部屋へと向かった。

リリイの部屋につくと、3人はそれぞれ座るとクロウとリリイは少女を見た。

「まず、お前は何者だ?」

「私はシズクよ」

「ねえ、シズクって種族は何?」

「種族?」

「私は妖精族だけど、苦労は人間なの。」

シズクは妖精族でもないし、魔族でもないし、獣人でもないし…

「私は“神種”よ」

「神種？聞いたことのない種族だな。神種ってなんだ？」

「神の子のことよ」

「神の子…？」

「じゃあ、お前は神なのか？」

「私は神から生まれたけど、神じゃないわ。

神になるといつことは世界の王だから。私は世界の王じゃないから
神じゃないわ。

だから私は神種なの」

「じゃあ、あの“契約”って言ってたあのキスはなんなの？」

「契約の証は口づけ。

王の血を引く者には世界の王になる資格が与えられるの

「王の血？」

「王の血を引く者ならだれでもいいの。

妖精族の王の血縁者でも魔族の王の血縁者でも獣人族の王の血縁者
でもいいの」

「ちょっと待つてよ。シズクの言つことが本当ならクロウに契約を
するのはおかしいわ

「どうして？」

「クロウは王の血をひいてないもの」

「やうなの？」

シズクは首をかしげてクロウを見ると、クロウは口を開いて答えた。

「俺は王の血は引いていない。人間だしな」

「そうなの？でも、おかしいわ。王の血をひいていないなら契約で
きないもの。

あなたと私の間には契約が成立しているわ」

「なにか誤算が生じたんだろう?
人間の王なんて聞いたことないしな」

「そうかしら」

「分かつたならさつさとクロウとの契約を破棄してよー」

「『めんなさい。契約破棄の仕方がわからないの』

「え? わからない?」

「王の血をひいていない人と契約が成立するとは思わなかつたから
…。

だから私、わからないの

クロウとソリイは同時にため息をついた。

「じゃあ、何でお前は大樹の中にいたんだ？」

「あの大樹はマナがたくさんあったから。マナが強いところに自然と惹かれたの」

「確かにあの大樹には昔から精霊が宿ってるからマナが強いとは聞いてたけど…」

「とりあえず今日は疲れたから寝る。リリイ、シズクは頼む」

部屋を出でていこうとするクロウにシズクは声をかけた。

「クロウは一緒にやないの？」

「俺は村の者じゃないからな。家はないし、この村には宿もない。俺は外で寝るんだ」

「クロウは村の人じゃないの？」

「この村にはかくまつてもうつてるだけだからな」

「どうしてかくまつてもらつてるの？」

「クロウは人間でしょ。人間とドワーフってね今じゃ珍しいのよ。
絶滅危惧種よ。天然記念物的存在よ」

「（それは言いすぎな気がするが…、まあ、あながち間違いじゃないな）」

リリイの言ったことに對してクロウはそう思っていた。

クロウがそう思っている間にリリイはシズクに説明を続けていた。

「人間とドワーフは保護対象なのよ。公　おおやけ　にはされてないから一般人には知られてないけど、少なくとも妖精軍にクロウが見つかったらきっと捕まえようとするのよ」

「やうなの？」

「この村に来る前は軍に追われる」とはそれなりにあつたからな。お前と話してたらさらに疲れた。早く寝たい…」

クロウは独り言をしながら、リリイの部屋を出て行つた。
部屋にはリリイとシズクだけが残つた。

「とつあえず、お風呂に入つて」飯でも食べましょ！」

「お風呂に入るの？」

「シズクはずつとあの大樹にいたなんらずつとお風呂に入つてない
んでしょ。

お風呂に入るのは女の子のたしなみよ」

「やうなの？」

次の日になつてクロウはまた大樹のある場所にいた。
そして、大樹の光つていた場所に触つていた。

「……世界を旅しても、分からぬことは、まだあるんだな…」

「クロウ……」

リリイがクロウの名前を呼びながら、クロウのところにシズクと一緒に走つてきた。

様子からしてあわただしいようだつた。

「どうした？ まだジーさんが呼んでるのか？」

「違うの。 村に妖精軍が来てて…」

「軍が？ なんで、こんな何もない村に？」

「おじいちゃんを連れていこうとしてるの…」

「ジーさんつて確かに昔は軍に所属して、今は引退してるはずだろ。
今になつてジーさんを連れていくなんてどうこいつもりだ？」

「よくわからないのなら、村に行けばきっとわかるわ」

「でも、軍がいる村にクロウが行くのは危ないわよ」

「……いや、俺は行く」

クロウの答えにリリイは驚きを隠すことができなかつた。

「どうしてー？ クロウは軍から逃げるためこの村に来たはずよ」

「なんだかんだ言つてあのジーさんには世話をになつてゐるからな。恩をあだで返すわけにはいかないだろ」

「クロウがそこそこならわかつたわ。でも、クロウはどこかに行つちやいやだからね」

リリイはせせうれしつと、クロウの手をつかんだ。
クロウはただリリイを見ていた。

「……」

「クロウはどこで行かないでね

「……行くぞ」

クロウはリリイの手を振りほどくと、急いで村へ向かつた。
シズクもクロウの後を追うようटて村へ向かつ。
リリイは小さくなつていくクロウの背中を見つめていたが、すぐこ
村へ向かつた。

「世界を妖精のものとするために我々には戦う人が必要なんです。そのためには敵から“剣豪”と呼ばれたあなたの力が必要なんです よ、ゼーラン殿」

「こんな村まで来て何の用じゃ。わしはもう現役を引退したはずじやが？」

村長が軍をまとめているであろう男に話かける。

村にはリリイの言つ通り妖精軍がいて、村長がつかまっていた。その様子をクロウ達は物陰からのぞく。

「わしは剣を持つ気はまつたくないぞ」

「そう言つと思いました。それでも、私はあなたに来てもらいます。
そのためならば手段は選びません」

男は部下に命図をすると、部下は村人の女を一人つれて来た。
そして、村人に剣を向けた。

「きやあ……」

「……」

「ダルシアン、お前さんは相変わらず田的のために手を選ばん
のじやな」

ダルシアンと呼ばれた軍の男は再びゼーザンを見た。

「自由に選択させてあげますよ。

ただし、あなたが断れば、村人が一人ずつ消えていきますが」

「村長！私たちのことは気にしないでくださいー！」

周りの村人たちはゼーザンにそう言い放った。
しかし、ゼーザンの心は村人たちの言葉とは裏腹だった。

「村の者たちを守れないで何が村長じゃ…。」

「これもお前たちを守るためじゃ…。お主らと…」

『なんだ、おお…ぐわつ』

突然、向こうのほうが騒がしいことにそのまま全員は気付いた。ダルシアンは不機嫌そうな顔をして、部下たちに尋ねる。

「何事だ?」

「何者かが軍の者を次々と倒しています…!」

「何!?」

ダルシアンが報告を受けた次の瞬間、殺氣に気付き、ダルシアンは剣をかまえて襲ってきた者の攻撃を防いだ。

ダルシアンに攻撃を仕掛けたのはクロウだった。

「ぐつ…!」

「悪いが、ジーさんを連れて行かせるわけにはいかねえ」

「クロウ…! お前、なぜ来たんじゃ! ?」

ゼーザンはクロウの姿を見て、とても驚いていた。
クロウはゼーザンを見て、無事な様子でほつとしていた。

「ジーちゃんに恩返しだよ」

「だが、お前ちゃん…」

「気にするな。ここつりを倒せばそれで問題はない」

ダルシアンはクロウをジロジロとみていく。

「あなたは人間ですね」

「だとしたらどうするんだ?」

「人間は手厚く保護するように言われていましてね。
我々と来ていただけませんか?」

「断る。ずっとお前の監視下にあるのは嫌だし、面倒だからな」

「なるべく手荒なことはしたくないんですがね…。
ですが、あなたが生きていれば問題はありません。
手足がなくともねつ…!」

ダルシアンは言い終わるか終わらないかで、クロウに攻撃をしてきた。

クロウはダルシアンの攻撃にすぐさま反応し、大剣で攻撃を防ぐ。剣と剣がはじきあう音が響き続ける。

「なかなかやりますね。

人間は取り柄のない生物だと思っていましたが…」

「人間でも武器で戦うくらいはできるぞ」

クロウの戦いの様子を遠くから見ていたシズクとリリィ。

「クロウ…」

今まで黙つて見ていたシズクは杖とともに出現させ、クロウのところへと歩いて行つた。

「シズク、危ないわよー」

リリィはシズクを呼びとめるが、シズクは聞く耳を持たなかつた。それどころか歌を歌い始めた。

「

「…」

その歌声はクロウたちにも聞こえていた。

「何だ？この歌は？」

「ダルシアン様、なんだか力が抜けて…」

「私もです…」

ダルシアンの部下たちはどんどん力がぬけてゆき、膝を地面につけていった。

「くつ…！力が…」

ダルシアンにもその効果が表れていた。

しかし、他の者とは違い、なんとか立ち続けてはいた。

「クロウ…」

「リリイ…。この歌は…？なんだか、力が抜けていくんだが…」

「シズクが歌つてるのよ」

「シズクが？」

クロウがシズクを見ると、シズクは歌つてていたが、歌うのをやめてしまつた。

そして、苦しそうにした。

「シズク！」

クロウは素早くシズクにかけよる。

「大丈夫…。少し疲れただけだから…」

歌がやむと、軍人たちは力がはいるようになり立ち上がつた。
リリイはクロウのところへと急いで行つた。

「クロウ、どうしよう…」

「……」

「クロウー！一人をつれて逃げるのじゃーー！」

「おじいちゃん！？」

ゼーランはクロウにやつぱり、リリイは驚く。

「お前の恩返しなんぞいらんわい！
どうしても恩返ししたいなら、リリイを頼むぞい！！」

「……わかった」

「おじいちゃんを見捨てるの！？」

「いくら剣の達人でも、この圧倒的不利な状況で勝つのは難しい。
逃げるのが一番いい方法だ」

リリイはクロウにそう言られて、周りを見た。
クロウたちに対して軍人は武器を持っていて、人数も圧倒的に不利
な状況だった。

「…わかつたわ…。おじいちゃん、元氣でいてね。死んじゃ嫌だよ
！…」

クロウはシズクとリリイを連れて村を出ようとした。
しかし、クロウの目の前に軍人が立ちふさがる。

「人間を田の前に逃がしませんよ」

「邪魔だ」

クロウはそう敵に冷たく言い放つと、大剣で軍人を斬りつけた。道ができると、村の外へと走った。

「逃がしてはいけません！ 追いかけるのですー！」

ダルシアンの命令で数人の部下がクロウ達を追いかける。

クロウ達は走りながら話合っていた。

「とりあえず、森に行くぞ。森から町にいけるはずだ」

「うん…」

クロウ達は森へと逃げ込んだ。当然、敵はクロウたちを追つて森の中へ入るが、木々が邪魔でクロウたちを見失った。

「おじいちゃん…」

「大丈夫だ。話しからするとじーさんを殺すわけじゃないみたいだしな」

「うん……」

クロウが落ち込むリリイを励ますが、リリイは落ち込んだままだった。

そんなリリイを見て、クロウはため息をつくと、リリイの頭にポンと自分の手を頭に置いた。

「気休めでしかないが、お前は一人じゃない。できる限り、俺がお前のそばにいてやる。だから泣くな」

「クロウ……ありがと……」

リリイは顔を上げていなかつたから、クロウとシズクには見られていなかつたが、涙を流していた。

クロウたちは森の奥へと進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911m/>

スフィアの神

2010年10月11日12時38分発行